



草話が語る暮らしの歴史

須賀 丈

昭和 20 ~ 30 年代の豊田市での暮らしの聞き取りによると、水田には面積あたりその半分かくらいの草刈り場があり、刈草を肥料として田に鋤き込んでいたとのこと¹⁾。草刈り場ではササユリ、キキョウ(写真1)、オミナエシなどが咲いたそうです。キキョウ、オミナエシは『万葉集』の秋の七草の植物です。

このような草地は、近年急速に人里の周辺から姿を消しました。百年前に国土の1割を超えていた草地が今では1%程度にまで減ったとされています。キキョウは現在、レッドデータブックに載る絶滅危惧種です。このような草地は、開発のほか、利用されずに森林化することによっても失われます。では温暖な後氷期の約1万年間、草地はどのように保たれてきたのでしょうか。このことを知るには縄文以来のひとの歴史に目を向けなくてはなりません²⁾。

人里の草地の植物には、氷期に大陸東部から朝鮮半島を通して入り込んだものが多いとされています。そのなかにはワレモコウ(写真2)、ススキなど中国東北部に現存する草原植生の一種「草甸」^{そうでん}にも生育してい



写真2 ワレモコウ

るものが多いとされます。日本列島の草甸は、後氷期になると河川の氾濫のほか火入れ・放牧・採草などの人間活動で保たれてきました。このような適度な人間活動で維持される草原を、半自然草原といいます。

火の使用をともなう草原利用は縄文時代から続いてきた可能性があります。その手がかりとなるのが黒ボク土(写真3)です。これは長く草原の続いた場所にて



写真1 キキョウ



写真3 黒ボク土(長野県霧ヶ峰)

きる黒い土です。各地で縄文時代から生成がはじまり、植物の細かい炭を多く含みます。関東平野や中央高地など、縄文遺跡の多い地域では黒ボク土が見られます。縄文人が植生に火を入れた理由はわかっていませんが、狩猟に適した景観や生活に使う植物の生育を維持したことなどが考えられます。

古墳時代には組織的な馬の飼育が日本列島に持ちこまれました。『万葉集』には馬や野焼きの歌があり、律令時代の文書には牛馬を飼うため野焼きをして草を生やすことが書かれています。このころの牧(牛馬の放牧地)は、氾濫原や扇状地、火山の山麓、台地などにありました。牧は街道筋に多く、河川沿いの牧は水運とも関係していたようです。全国的に古い時代の牧が黒ボク土の分布によく重なることも知られています。

弥生時代にはじまる水田稲作は、近世に大きく拡大

します。刈草を肥料とする^{かりしき}刈敷農法は江戸時代にも広く行われました。屋根をふくためのカヤ場、牛馬のえさのための採草地・放牧地もあり、8割近くが草地や草地的な景観だった地域もあったようです。

半自然草原は、20世紀中葉からのエネルギー革命などによりほとんど使われなくなり、そこを生息場所としてきた植物や昆虫などとともに姿を消すようになりました。けれども近年、こうした草地を再生・保全する活動が各地で行われるようになってきています。このような草地やその希少な生物は、氷期から続く地域の歴史の語り部ではないでしょうか。

(すか たけし、長野県環境保全研究所 主任研究員)

文献

- 1) 養父志乃夫(2009)『里地里山文化論(下)』(農山漁村文化協会)
- 2) 須賀 丈・岡本 透・丑丸敦史(2012)『草地と日本人』(築地書館)

矢作川流域の草地と昆虫

間野 隆裕

昆虫には、植物を食べて生活する種類が極めて多く見られます。草地特有の植物を食べる昆虫は、餌植物と同じ草地で成長する事になります。

草地といっても、道路脇や庭先から、里山、山地草原、そして高山のお花畑まで様々です。道路脇や庭先に普通に生育するカタバミという植物は、ヤマトシジミというチョウの幼虫の唯一の餌で、最も身近に見られる

チョウの一種ですし、スイバやギシギシという植物には、赤い色をした可憐なベニシジミの幼虫がつかます。これらの昆虫を捕食する鳥も含め、草地特有の生態系が形成されます。街中により豊かな自然を呼び込むには、緑を創出する際、街路樹など特定の樹木だけでなく多くの植物からなる草地を残す事が、この点からも重要になります。



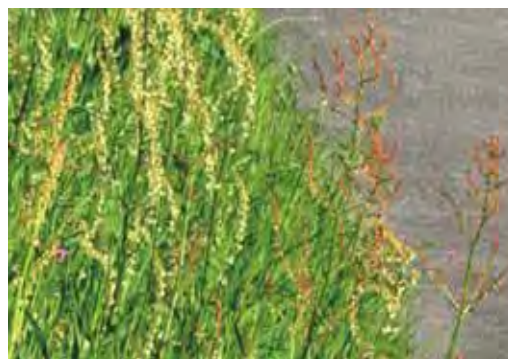
ヤマトシジミ



ベニシジミ



ヤマトシジミの食草
カタバミ



ベニシジミの食草
ギシギシ(左)と
スイバ(右)



ワレモコウを食べるゴマシジミ (旧旭町産)

繋がっています。例えば減少したワレモコウを唯一の食草とするゴマシジミは、かつて多く見られましたが、矢作川流域はもとより愛知県全域でここ10数年採れておらず、全国的にも激減しています。丘陵地から山間地の草地は開発や植林、遷移の進行など様々な原因によって少なくなっており、それが草食性昆虫の減少に直結しているのです。

草食性昆虫の個体数の減少は、それを食べるカマキリ類やトンボ類など肉食性昆虫の減少も引き起こしています。特にトンボ類では、成虫が生活する場所とし

里山や山地草原にはあまり見られなくなった植物も散見され、そのことは昆虫の減少にも

て池や河原付近の草地の存在が重要な種類もあり、草地の減少と幼虫の生活圏(水場)の減少・悪化とのダブルパンチで生存が危険にさらされています。

ススキ等が生育する山地草原には、セセリチョウ類が何種類も生息しますが、種毎に生息空間や生態が微妙に異なり、一律ではありません。ススキの原っぱがブルドーザーで開発されると、そこに生息する全ての種は絶滅します。しかし草地の状況が一見変わらなくても減少したセセリチョウ類は何種もわかっており、それらがどのような原因で減少したのか、はっきりとは調べられていないのが実態です。ワレモコウを食べるゴマシジミは、幼虫の一時期アリの一種と一緒に生活する事が知られています。そのアリが減少することもゴマシジミの減少に影響すると考えられますが、愛知県ではそのアリが減少したかどうか、実は確認されていません。草地の減少と共にそこに生息する昆虫が、理由もわからず知らないうちに絶滅してしまう事は大変残念でなりません。早急な現状の把握が望まれます。

(まの たかひろ、豊田市矢作川研究所 総括研究員)

矢作川河畔の草地と鳥

高橋 伸夫

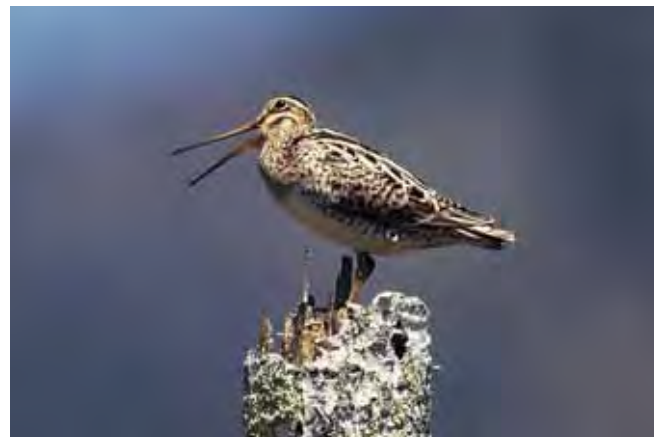
矢作川の流域では自然状態で草地が維持される環境は限られ、本流の上流から中流域では川岸まで森林が迫っている。平野部を流れる下流域では人工の堤防により流れが制限されており、草地の多くは自然状態と異なる種で占められている。野鳥には樹木に大きく依存して生活する種が多いが、これらを含め矢作川の草地に生息する野鳥について紹介する。

矢作川の水源には三国山や萩太郎山、井山などが含まれる。標高1000m程度の山頂付近は高緯度地方の環境に似ており、繁殖する野鳥も低地とはかなり異なる。牧畜に適した環境では牧草の草地が作られ、湿地を含む水辺の草原は高原の夏鳥である大型ツグミ類などが餌場として利用していた。草地で繁殖していたビンズイは1970年代まで、同じくオオジシギやホオアカも2000年代半ばまで姿を消したようである。森林性の野鳥も同様の傾向にあり、温暖化や環境破壊は高原に生息する野鳥に大きな影響を及ぼしている。

上流から中流域は流れが速く水量も多いが、支流にある農業用水路などでは流れが緩やかな部分にツルヨシなどが生え、下流域のヨシ原と同様に野鳥が利用する場所となっている。

平野部を流れる下流域で最も面積の広い草地は、堤防の法面や高水敷を覆う芝生を基とした草地である。地形や植物の種類、草丈や粗密などにより集まる野鳥は異なる。ムクドリやカラス科、ハト科、キジ科、ツグミ科、セキレイ科、ホオジロ科、アトリ科や猛禽類などがここを餌場として利用しており、コチドリやヒバリ、キジなどが繁殖している。

水辺に広がる砂や砂利の環境では、イソシギやイカルチドリ、シロチドリ、コアジサシなどが繁殖する。



オオジシギ (杉山時雄氏撮影)



キジ

営巣場所は全く植物の無い裸地でなく、疎らに草の生えた環境を選ぶ。

牧草やカラシナなどが密生した草地で観察できるのはキジ程度であるが、ここで生産される種子や生息する小動物は、拡散して野鳥を含む生態系の一部を担っている。

水に浸かる環境に生えるヨシは、最も多くの野鳥が利用する植物である。河辺のヨシ原で繁殖できる種はオオヨシキリやクイナの仲間であるが、繁殖を終わったツバメが夜間に何万羽と集まり、スズメやムクドリ、コムクドリ、サギ類などもヨシ原にあるヤナギの幼木に集まって^{ねぐら} 埒をつくる。ここで実施されている環境省

の標識調査では、水辺の草地に生息する上述の種の他に、キツキ科やカワセミ科、フクロウ科やタカ科の種を含め、野外観察だけでは確認できない渡りの途中や越冬中の小鳥類が数多く確認されている。

ヨシ原に土砂が堆積してオギやセイタカアワダチソウなどの乾燥した草地になると、キジやカルガモ、ホオジロ、セッカなどが繁殖し、秋冬にはホオジロ科やアトリ科などの種が集まるが、夏期には密生した植生にクズも加わって野鳥の環境ではなくなる。しかし西尾市のキツネや安城市のタヌキには、こうした環境が重要な生息地であるのかも知れない。

(たかはし のぶお、西三河野鳥の会事務局)



オオヨシキリ

矢作川「川会議」が開催されました！

5月12日(土)「矢作川をもっともっと知ろうII」をテーマに第12回矢作川「川会議」が開催されました。今年の川会議は晴天に恵まれ、午前の「子どもアマゴ釣り大会」には129名、午後のシンポジウムには218名の参加がありました。

シンポジウムでは上流域で発足した3つの水辺愛護団体による活動報告と、作家の川端裕人さんによる基調講演「川と、子どもがいる風景」が行われました。川端さんはご自身が暮らす多摩川への思いや多摩川を舞台とした作品、ニュージーランド滞在時の経験から学んだ川に対する行動様式の民族的な違いについてご紹介されました。その後

矢作川水族館長の阿部夏丸さんがコーディネーターとなり、会場の皆さんのご参加のもとディスカッション「矢作川の今物語」が行われました。多くの方が、これから子ども達が川でいろいろな体験をできるようにするためには自己責任の徹底と、子ども達自身が川で遊ぶ危険を乗り越える力を身につけることが必要だという思いを共有していました。ご参加下さいました皆様に感謝致します。(洲崎、内田り)



川端裕人さんの基調講演

後記

世界農林業センサスのデータによると、矢作川上流域の伐採跡地・未立木地(草地)面積は1960~2000年の間に30%弱まで減少しており、それとともに多くの草地性の生き物がすみかを失ってきたと考えられます。まずはこれ以上草地を減らさないために、身近な原っぱとそこにすむ生き物の存在にいつも気を配るようにしたいものです。(洲)